

生活科学習指導研究委員会

一 研究テーマ

対象と夢中になって関わる中で、自己発揮していく子どもの育成

二 テーマ設定の理由

本年度は、「子どもと共に活動を創り出し、共に楽しみ学び合っていく生活科を目指していこう」と本委員会をスタートさせた。また、昨年度までの研究から、子どもが自己発揮していくことができる環境として、対象と夢中になって関わるができる場を仕組んでいくことの重要性を確認し合い、本テーマを設定した。

そして、研究を進めるにあたって、以下の点を重点に据えた。

研究の視点

- ① 対象と繰り返し関わることで見えてくる子どもの姿とその変容
- ② 子どもの追究に寄り添う教師の支援のあり方

上記の視点について、委員それぞれの実践から追究していくことに加え、教育課程研究協議会生活科（丸子中央小学校2年生）の実践からも学ばせていただきたいと考えた。

三 研究の経過

5月 6日（木）年間計画立案

6月10日（木）生活科教育課程研究協議会事前授業

8月 5日（木）生活科教育課程研究協議会準備

9月 8日（水）生活科教育課程研究協議会

丸子中央小学校2年生

「まるっ子ちょうさたい！ピッカピカ まるこほいくえん」

10月26日（火）実践報告 まとめにに向けた計画

11月29日（月）総委員会 研究のまとめ及び研究発表について

令和4年 1月18日（火）研究発表会

四 研究の内容

1 A 小学校 2年

まるっ子ちょうさい！ ～ピッカピカ まるこほいくえん

(1) 単元設定に至るまで

2年生の子どもたちは、自分たちの住む丸子のよいところを見つける『まるっ子ちょうさい』で、近所の川や文化ホール、桑など、様々な丸子の魅力を発見してきた。また、田んぼで農家の方と交流した時には、田んぼのよさを感じると共に、自分たちを迎えてくださった農家の方の優しさに触れ、人と触れ合うことの心地よさを感じることができた。さらに丸子のよさを調べる中で、本校のすぐ隣にまるこ保育園が今年度新しく開設された。1年生の時から園舎が出来上がる様子を毎日のように見てきた子どもたちは「いつか行ってみたいな」「保育園の中に入ってみたいな」という思いを持っていた。工事が終わり、登下校時に子どもたちが園のすぐそばを通ったり学校の敷地内を園児が散歩するようになったりすると、保育園をより身近に感じられるようになり、保育園やそこに通う園児に対する子どもたちの関心が高まってきた。

そのような子どもたちに、ピッカピカの新しい保育園のよさを調査し、園児と触れ合う事を通して、身近な人々と関わることの楽しさを感じたり、相手のことを想像して活動したりすることができるようになってほしいと願い、本単元を設定した。

(2) 園児との交流を通してみえてきた子どもの姿

まるこ保育園の秘密を探るべく、初めて保育園に入った子どもたちは、園舎の新しさだけでなく、水道の蛇口の高さが小学校に比べて低いこと等も発見し、施設が園児に合わせて作られていることに気づくことができた。保育園で遊んでみたいと願いを持った事をきっかけに、園児との交流が始まった。

年長児のばら組（以下 ばらさん）との1回目の交流。盆踊り、手作りお化け屋敷の招待、ドッジボール、自由遊びなど、保育園という場でいろいろな遊びを園児と一緒にすることができた。ばらさん対2年生とのドッジボールはとても盛り上がった一方、ドッジボールが苦手と一緒に遊べない園児の姿も見られた。また、自由遊びの時間になると、子どもたちは園庭の様々な場所へ行き、遊びを楽しんでいたのだが、ばらさんどうし、2年生どうしで遊んでいる姿がほとんどで、2年生からばらさんに関わっていく様子はあまり見られなかった。

この交流の様子を写真とともに振り返った子どもたち。自分達や園児の様子を客観的に見返すことで、園児の思いに触れる事ができ、自分達は何ができるのかを考え始めた。

そこで子どもたちは「もっとばらさんとなかよくなりたい」と願いをもった。年齢の違うばらさんと一緒にできる事はないか考えていたときに、体育で取り組んでいたポッチャで遊ぶのはどうかという意見が出てきた。この時はちょうど東京オリンピック開会直前。オリンピック・パラリンピックの動画を見て、子どもたちはポッチャの存在を知ることができた。



だれでもみんなが楽しみ、みんなが笑顔になれる。そんな可能性をボッチャに感じ、子どもたちはばらさんと一緒にボッチャで遊んでみたいと考えるようになった。



(3) ばらさんも自分たちも楽しめる

ボッチャのボール作り

子どもたちが体育で使っていたボッチャのボールは外部から借りていた物で、しかもばらさんと交流するには数が足りなかった。そこで自分達の手でボール作りに挑戦することにした。ボール作りの材料として砂、ビニール袋、靴下、アルミホイル、ガムテープを用意した。

まず多くの子がビニール袋に砂を入れ、それをアルミホイルで包み、形を整え、丸くなったところでガムテープを巻いていった。ばらさんのことを意識していたのか、全体的に軽く小さめのボールを作る子が多く見られた。作ったボールを早速転がしてみると、まっすぐ転がる物もあれば、表面がでこぼこして思うように転がらないボールもあった。



自分達が作ったボールは、ばらさんにとっても投げやすいボールになったのか確かめるため、保育園へボールを持っていき、実際にばらさんに投げてもらうことにした。ばらさんが投げやすいようにと考えて小さく軽く作ったボールは、思った以上に転がりすぎたりはねてしまったりした。ばらさんからは「もっと重くて大きい方がいい。」という感想が聞かれた。

改めて、ばらさんだけでなく自分たちもふくめた「みんな」がボッチャを楽しめるためのボールを、大きさや重さ、形に目を向けて作り方を考えていった。

(4) 子ども達の追究の姿から (児童名は仮名)

“みんなが楽しめる” 3組ボッチャのボールを作るため、教師は「どんなボールを作りたい？」と自分の願いを確認した。「重いボール」「ちょっと重くてちょっと軽いボール」「おもかるいボール」等、それぞれに作りたいボールのイメージを確認して、追究場面に入った。その中で、子ども達の中で次のような姿がみられた。



①友だちとのかかわりによって追究が深まったと思われる姿

ひかりさんは「ちょっと重くてちょっと軽いボールを作りたい」と願い、隙間やでこぼこができないようにアルミホイルを五重にして巻きつけていった。アルミホイルで巻き上げると、ガムテープをはさみで細く切って貼っていった。ガムテープを貼り終わると、でこぼこをなくそうと、ガムテープの芯でコンコンと叩いていったが「でこぼこがなくなる。」と困った様子で友だちに話していた。そのとき教師から「友だちのボールも投げてみた？」と言われ、友だちのボールを投げてみると、まっすぐに転がっていった。そして再び自分のボールを手にとると、時間いっぱいガムテープの芯で表面を叩き、さらにボールを丸くしていった。友だちのボールを転がすことで、「自分のボールをさらに丸くしたい」と願いを強くした姿をみることができた。

②場の設定により追究が深まったと思われる姿

はるさんは「丸いボールを作りたい」と願いをもち、靴下に砂を入れ、それを綿と一緒に袋に詰めてボールを作り、お試しコーナーで転がしてみた。しかしボールはまっすぐ進まず、ボールのゆがみを直そうと調整してみるが、なかなか思うようにいかなかった。

そこで今度は袋の中身を砂だけにしてボールを作ることにした。さらにガムテープを巻く前に両手を使って何度も握って丸くしてから、ガムテープを少しずつ切り、伸ばすようにすきまなく貼り付けていった。でき上がったボールを手にお試しコーナーへ行き早速投げってみると、きれいにまっすぐ転がった。「よっしゃ！」とうれしそうに、何度もボールを転がしていた。

はるさんにとっては、お試しコーナーがあることで自身のボールを改良することにつながっていったと思われる。



③対象と繰り返しかかわりながら学びを広げていった姿

初めてのボール作りの後、「いいボールなんだけど、曲がっちゃう。」とつぶやいていたりくさん。今回は「丸くてまっすぐ転がるボールにしたい」と願いを持って活動に入った。はじめに前回決めた“ちょうどよい重さ”の感覚をたよりに、何度も重さを確認しながらビニール袋に砂や小石を詰めていった。

次に砂が入ったビニール袋を靴下に入れると、それを新聞紙でくるんでいった。思ったように丸くならなかったようで、一度くるんだ新聞紙を取ってもう一度ギュッと丸め、それをまたのぼしてくるんでいった。しかしそれでも納得がいかなかったのか、新聞紙を使うのはやめ、アルミホイルコーナーへ向かっていった。そして新聞紙と同じく、アルミホイルも一度ギュッと丸めてから広げて、丁寧に角をつぶすようにくるんでいった。

包み終わると、指先で角を丁寧につぶし、両手でギュッと握って丸さを確認していった。さらに「ガムテープでとんとん叩くと、まっすぐに転がるようになるよ」という友だちのアドバイスを生かし、あらゆる方向からトントンと叩き、さらに角をつぶしていった。前回のボール作りでは、角ができないように、かなり気を遣ってガムテープを貼っていたが、それでもまっすぐ転がらないという課題が残った。そのため、前回とはガムテープの貼り方を変えている姿が見られた。アルミホイルとの間に隙間ができないように、指で表面をこすりながら丁寧に貼っていった。2枚目のガムテープも貼ってはがし、どの位置に貼ったら角ができないか、何度も試しながら貼る位置を決めていった。また、ガムテープで表面すべてを包むことはせず、あえてアルミホイルがむき出しになっている部分を残すことで、りくさんの丸さへのこだわりが感じられた。その後お試しコーナーで転がしていると、思った通りまっすぐ転がり、「よし。」とつぶやくりくさんの姿があった。

続いて2個目のボール作りに入ったりくさん。1個目と同じく、砂や小石が入ったビニール袋を靴下に入れ、必要のない部分を切り落としていった。しかし、これまでのボール作りの時と比べて、その様子に大きな変化が見られた。

必要のない部分をいきなり切り落とすのではなく、まずは靴下の上の方から少しずつ切っていた。そして残す部分が多すぎても少なすぎても「丸い」ボールにならないと考えたのか、切り口を丁寧に

処理していた。前回は切り残した部分が多く、出っ張りの原因になったことから、靴下の切り方を大事にしたのではないかと考えられた。

最後にりくさんは、切り口が出っ張らないように丁寧に内側に折り込んでいった。一連の作業の中で、りくさんのたくさんの工夫がみられた。

友だちとのかかわりや教師の支援の中で、対象と繰り返し関わることで願いが更新され、試行錯誤し続ける姿へとつながっていった姿が、私たちが考える「対象とじっくり関わりながら学びを広げる」姿ではないかと考えている。

④教師が支援に迷った追究の姿

ゆきとさんは「本物に近いボールを作りたい」と願いながらも、本物よりも重く、大きなボールを作っていた。教師は「持ってみて。どう？重い？ポッチャの重さになった？」と声をかけ、本物以上に大きく、重くなっていることに気付いてもらおうとしたが、「でかすぎてダメだ。でも他の玉をどかせるな。」「意外といいよ。」と、ゆきとさんは重くて大きなボールのよさを見出していた。結局、大きくて重いボールを一つ作り上げていた。

願いと明らかに違う大きさのボールになっていることに気付いてほしいと思いつつ、子どもの意欲を大切にしたいと考えた教師。どのような声がけや支援をすればよかったのか、考えさせられた場面であった。

(5) さらに深まる園児との交流 ～「ばら3ピック」をしよう～

今度はばらさんを小学校に招待して、ばら3ピックを行うことにした。その日、子どもたちは、まず自分たちがいつも過ごしている場所“2年3組の教室”を案内することにした。自分たちが育てている動物・魚について説明をしたり、自分が使っている椅子に座らせてあげたり、それぞれペアのばらさんの様子を見ながら何を紹介するか考えている姿が印象的だった。また、ペアの子が「わ～!」「すご～い!」と声をあげ、ニコニコと嬉しそうにする様子を見て、2年生の子どもたちもとても嬉しそうにしていた。



机の上に置いてあったポッチャのボールに早速興味を持つ園児もいて、それに気づいた子どもたちは「これが、ぼくのボールでね、すごく持ちやすいんだよ。」「〇〇君のボールはまん丸なんだよ。」「こんなボールもあるよ。」と、自分が工夫して作ったボールを自慢げに説明していた。すると、そのボールを投げてみようとする園児が出てきて、「まだまだ(待つて)！」と慌てて声をかけながらも、嬉しそうにしている子どもの姿が見られた。

そして体育館に移動し、ばら3ピックの開会。ポッチャだけでなく、じゃんけん列車や歌、2年生によるダンスの発表…と、プログラムは子どもたち自身で決めていった。内容はすべて“ばらさんも自分たちも楽しめるかどうか”であった。そのために、ばらさんに知っている歌の調査に行ったり、(けがをしている人でもできるか)片手でじゃんけん列車を試したりして、みんなで楽しめるかどうか検証するというアイデアは子ども達から出てきた。検証の段階から楽しんでいる子ども達の様子から、ばらさんとの交流を以前より楽しみにしていることが伝わってきた。

さて、初めは少し緊張気味だった子どもたちも、プログラムが進むにつれて緊張が解け、自然で自由な関わりも生まれるようになっていた。そしてポッチャの時間がやってきた。まず簡単なルールを説明し、4つのグループに分かれて行った。

ばらさんが投げるボールは、ばらさんが選べるようにするとあらかじめ決めていた。いざボールを選んでもらう時になると、まん丸のボールにこだわって作ったひかりさんは「このボールだったら、まっすぐ転がるよ。」と、自分のボールのよさをアピールし、本物みたいに作りたいと試行錯誤を繰り返したりくさんは「持ってみて！このズシってするのがいいんだよ。」と何人かの園児に持たせていた。自分の願い通りに作ることができたボールに誇りのようなものを持っていることがその姿から伝わってきた。また、「これはどう？こっちのは持ちやすいよ。」と、友だちのボールをお勧めしている子もいて、一つひとつ違う友だちのボールのよさを感じている様子が伝わった。



その中で、面白いけれど明らかに重すぎるゆきとさんの“最強ボール”は、いくらゆきとさんが楽しそうにお勧めしても選ばれずに残っていた。ばらさんも2年生の子も、面白そうに手に取るものの、競技をする際には選ばなかった。重くて他のボールがぶつかってもびくともしないボールは“みんなで楽しめるボール”とは思えなかったのだろう。結局ゆきとさん自身も「重すぎるから」と言って、他のボールを使ってゲームを楽しんでいたが、最強ボールは最強ボールで、ゆきとさんにとっては大切なボールとなっているのかもしれない。

楽しかったばら3ピックが終了し、ばらさんのお見送りをするとともに「またやりたい！」「ばらさんとは次いつ遊べる？」と、子どもたちの中から声があがってきた。自分たちで計画し、自分たちで準備をし、招待したばらさんを楽しませることができたことを実感し、どの子どもも満足感でいっぱいの様子だった。

今度はどんな活動がばらさんとつながっていくのかと考えていると、ばらさんの先生から「今度、ハロウィンパーティーを保育園でやるのですが、2年生を招待してもいいですか？」と連絡があった。ばらさんからかわいらしい招待状とジャックオランタンをもらい、子どもたちは大興奮だった。

「先生、ばらさんとぼくたち、同じ（気持ち）だよ。」と招待状に書かれていた、“ばら3ピック楽しかった”“また遊びたい”という文字を見て嬉しそうに言うはらさんの姿に、“ひとと関わる”ことの心地よさを、改めて子どもたちに教えてもらったように感じた。

(6) まとめ

「保育園を知りたい」という願いからはじまった本単元。保育園との交流を繰り返していく度に、「保育園で遊んでみたい」という願いから、「ばらさんと一緒に楽しみたい」と、子どもたちの願いが変容し、深まっていった。そして、子どもたちが相手意識を持ったことで、みんなで楽しめる遊びや遊ぶための道具のあり方を考えることが必要なことに気づくことができた。

このように、児童は対象とじっくり関わることで相手意識が芽生え、追究する必要感が生まれ、試行錯誤を繰り返し、さらに追究を深めていくことがわかった。

この姿を支えたのは、子どもが十分に追究できる場づくりや、子どもたちどうして追究をより深めるための声かけ、さらに追究したことを客観的に振り返る場を意図的に仕組むといった教師の支援があったからではないかと考える。そしてこのような授業を積み重ねていくことが、研究テーマに掲げるような生活科につながると考える。

今後も子どもたちの学びを広げるために、教師が子ども一人ひとりの願いを大事に受け止め、子どもの追究場面におけるその瞬間をとらえた教師の声かけのあり方や子どもどうしでの必要感のある追究のあり方について研究を深めていきたい。

2 B小学校 2年

学校の周りを探検しよう

4月に学校の周りを見て歩いた時に、子どもたちが楽しそうだった場所へ行くことにした。子どもたちが行きたいと言った場所は、学校の西側（理科室の裏側）だった。そこは理科で使用する小さな池やいくらかの木々、フェンスの反対側には5学年がしようしている学校の田んぼがある場所であった。



5月7日

子どもたちが最初に興味を示したのは、教室から子どもたちの行きたい場所まで向かう途中で、様々な場所に咲いていたいろいろな花々だった。タンポポやクローバーなど、子どもたちの目につく花や葉をとっていた。「先生、見て見て。」と言いながら、見つけたものを嬉しそうに見せる姿があった。自分で何かを見つけたことに楽しさを感じているようであった。



何人かの子どもたちは、土に手を入れて遊んでいた。見つけた物を持ち帰る為のビニール袋を手袋代わりにし、その上に土を乗せて楽しんでいるようであった。ビニール袋の上から感じる土の重さやビニール袋を通して感じる土の温かさや何ともいえない触感が気持ちよかったのではないかと思った。教室に戻ってから子どもたちと一緒にやってみればよかったと後悔した。

5月14日

この日もどこに行きたいか聞くと「前回の場所（遊び場）へ行きたい。」という意見が多かったので、遊び場へ行くことにした。遊び場へ着くと、子どもたちはそれぞれに自分が興味ありそうな場所へ行った。男子の何人かが土を触っていたら、炭が埋まっていたと思われる場所を見つけたようで「ここの土が黒い!」と言いながら一生懸命土を掘り返していた。子どもたちの中に「土の中は、どんな土でも一緒だ。」「新しいものを見つけた。」という驚きと驚きからくる面白さを感じていたのかなと思った。黒くなった土をビニール袋に入れて嬉しそうに見せてくれた。



理科室の池の近くに、木製のすのこのような道具をひっくり返し、その下を見ている子どもたちもいた。下にはナメクジ、黄色いミミズのような生き物、ダンゴムシなど多くの生き物がいた。子どもたちはそこからダンゴムシを捕り、自分の手の平に乗せたり腕をはわせたり、ダンゴムシを触って丸めたりして楽しんでいた。今回はダンゴムシが子どもたちにとっての楽しみなことになったようで、様々な場所の物を動かしたり、地面を見たりしながらダンゴムシを見つけていた。数名の男子は木の棒をいろいろな物（武器）にして遊ぶ姿も見られた。「これ鉄砲だよ。」と言って木の棒を持った別の友だちと戦いごっこをしていた。



5月24日

女子の数々が、花で指輪を作って楽しむ姿があった。花や葉を見つけて楽しむ姿や捕った花や葉に一工夫して楽しむ姿も見られるようになってきた。



6月16日

朝、Aさんが「かたつむり見つけた。」と言って、カタツムリを見せてくれた、朝からカタツムリの様子を子どもたちが興味深そうに見ていた。子どもたちから「このカタツムリどうするの。」という声があがってきたので、どうしたら良いかクラス全員に話すと「見つけた A にどうするか聞いてみたい。」となり、Aさんは「クラスで飼いたい。」と言った。

見つけてきた子の気持ちや、周囲の友だちの気持ちを考えて「クラスで（飼う）」と言ったAさんの気持ちの温かさを感じる出来事だった。



6月18日

遊び場へ行くと子どもたちから「先生、田んぼの方へ行ってみよう。」という声があがった。そこで、この日は田んぼに興味がある子たちは田んぼへ行くことにした。田んぼには、水がはってあり、田んぼの中にはタニシやオタマジャクシがたくさんいた。タニシは手を入れてすぐに捕ることができたが、オタマジャクシはなかなか手で捕ることができず、悔しそうに田んぼの水を眺めている子どもの姿があった。何人かは道具があれば捕ることができそうということが分かっていたようで、「先生、今度は網を持ってきてもいいですか。」と聞いてくる子たちがいた。

雨でぬかるんであぜ道が滑るようで、転んだり田んぼの中に足を入れてしまったりし「先生、服と靴がびしょびしょ。」と言う子たちが何人もいた。子どもたちにとって、雨上がりのあぜ道を歩くことは、子どもたち自身が思っていたより難しいことを体で感じる日だったように思う。



6月25日

「桑の実っていう食べられる実があるんだよ。」と話す子たちがいた。

そのため、いつもの遊び場へ行く前に、この日は学校にある桑の木を見つけることにした。子どもたちはすぐに桑の木を見つけ、桑の実をもいで口の中に入れていた。「味がしないよ。」「まずっ。」「甘くて美味しいよ。」と様々な反応だった。ある子は美味しい実を食べるために、自分で美味しそうだなと思う桑の実を、色や形から判断しながら一生懸命見つけていた。「黒っぽい色が美味しい。」と話してくれた。「これ初めて食べる。」という子もいた。この頃からバッタが様々な場所で見られるようになり、バッタを捕まえて喜ぶ子の姿も見られた。



7月2日

この日は小雨だったが、みんなでいつもの遊び場と田んぼへ行くことにした。網の他に虫かごを持ってきたり、靴が濡れないように長靴に履き替えてきたりする子の姿も見られた。網を持った子たちは田んぼへ行き、オタマジャクシを捕まえていた。子どもたちの捕まえ方は、オタマジャクシのいそうな場所へ網を入れ、泥や土ごと網ですくうという方法だった。この捕まえ方が一番確実にオタマジャクシを捕まえることができるということを、今までの子どもたちの生活の中で経験しているから選んだのだと思った。



7月〇日

2時間目休みに水たまりで遊んでいた子たちから「水たまりでみんなで遊びたい。」という声があった。グラウンドは水たまりで遊ぶことはできないことを伝え、どうしたいか聞くと「いつもの遊び場へ行ってみて、水たまりがあれば遊ぶ。」という意見が出されたので、いつもの遊び場へ行くことにした。

いつもの遊び場には水たまりがあり、子どもたちは水たまりに手を入れたり長靴で水たまりに入ったりしていた。遊んでいるうちに、泥団子を作る子たちが出てきた。水たまりの中の土を使う子や湿った場所を探して泥団子になりそうな土を選んでいる姿も見られた。子どもたちは「ぴかぴかのどろだんご見たことあるよ。」と話す姿も見られた。雨の中でも、雨水の感触やそれに関わる自然物の変化を遊ぶ中で感じているのかなと思った。



9月〇日

ヒメリンゴの木を発見。食べてみる。「甘い。」「すっぱい。」

段差の上からジャンプして遊ぶ。場所から遊びを見つける子どもの発想の豊かさ。

友だちが高いところから降りるのを見て、それを真似してやって見る子の姿。できたことの満足そうな笑顔があった。初めて行った場所で秘密基地を見つけたような嬉しさを感じているようであった。



9月24日

稲刈り後の田んぼへ行く。

カエル、イナゴ、カマキリの生き物を集める。今までよりも簡単に見つけることができていた。たくさん同じ場所に行くことを通して、「だいたいここにいそうだな。」「とりかたのコツは〇〇だな。」ということ言葉をにしないが、子どもたちは自然と身に着けているのではと感じた。

稲の切った後の上を歩くと「ざくざくする。」という子どもの姿があった。学校生活の中でしか経験できないことの大切さがあるのではないかと子どもの言葉から感じた。



同じ場所へ行くことを通して学んだこと

- 子どもたちはその時そのときの興味あることに熱中している。子どもたちを熱中させているものが何かを自分自身で考えたり子どもたちと一緒に取り組み、子どもたちが感じているだろうと思うことを知ったりすることが大切ではないかと感じた。
- 生き物や植物の変化から、季節の変化を子どもたちは言葉には出さないが感じているように思う。
- 子どもたちがその場その場で会うものを通して、友だちとの人間関係を学んできているように思う。
- 子どもたちは、周囲の友だちがしていることを見て、真似をしている姿が見られた。真似をする中で、していることの面白さやその子に関わっているもののよさを子ども自身が体感しているのではないかと感じた。そして、その子ならではの工夫を見つけたり友だちと一緒に何かをしたりすることを通して、関わっているもののよさや楽しさを子ども自身が深めているように感じた。
- 子どもたちはどんな場所へ行っても子どもたちが「楽しい。」「こんなことしたらおもしろそうだな。」ということ自分たちで考え、実際に体を使って表現していることが多かったように感じる。どんなことでもすぐに遊びや楽しみに変えることができる子どもたちの発想力の豊かさや考え方の柔らかさに驚かされることが多かった。そして、私自身子どもたちが楽しいと感じる世界をほんの少しだけでも子どもたちと共有できる探検の時間はとても貴重な時間であった。「先生、今度探検いつ行くの。」「今度の探検は〇〇に行こうよ。」と目を輝かせながら伝えてくる子どもたちとこれからも一緒に探検を楽しんでいきたいと考えている。

3 C 小学校 2年

学校の周りにあるもの

『学校のまわりにあるもの』の単元で、小学校の周りを探検に行った。まず、子どもたちと学校の周りに教材と一緒に探しに行くことにした。最初の授業では、学校の周りを一周ぐると回ってみた。すると、子どもたちから

「こっちの方にコンビニあるんだね。」「こちらは、畑や池が見えるよ。」といった声が聞こえた。思い返してみると、一年生の時は新型コロナの影響で日常生活でも制限を受けて、学校と家を往復するだけの日々であった。ある児童が感想で





「学校の周りにいろいろなものがあることが知れてよかったです。もっといろいろ見てみたいです。」

と言っていた。子どもたちの中でさらに気になった場所を次々に意見がたくさん出てきた。親といった場所、友だちから聞いた場所、遠くから見たことある場所と様々な視点からの意見で黒板が溢れた。その言葉を受けて、学校の近くにある神社や大きな池、駅を見に行った。どれも子供たちにとってはかけがえのない時間になったのだと感じた。そして最後には学校の近くにある公民館に行って、活動している内容や施設の様子などを教えていただいた。公民館に行くまでに公民館について事前学習を行ったところ、子どもたちの中には、クラブチームや夏休みや土日での活動で利用している児童がいることがわかった。子どもたちからの情報だけでもたくさんのことを行っていることがクラスの中で共有することができた。その中で、児童の中に公民館に対する興味や関心が出てきたように思われる。実際に施設に出向き、館長さんの話を聞くことができた。また、施設を見学していく中で、

「あ、ここお母さんときたことある。」や「へえ。こんなことをしてたんだ。行ってみたいな。」

とつぶやく児童がいた。最後の感想のところでは、ある児童が

「自分の学校の近くにこんなところがあるなんて知らなかった。今度、家族と来てみたいです。」

と言っていた。授業後に児童たちが書いていたワークシートを見ると、気づいたことをたくさん書いていて、学校のまわりにあるものに気づくことが



できたのだと感じるとともに、さらに塩田地区について知りたいという意見などもあって、3年生の社会科の授業にもつなげることができたのだと思う。低学年はフィールドワークで外での活動が子どもたちにとって参加しやすく、そして多くのことに気づいて、友だちと対話できることが生活科のもつ1つの魅力でもある。子どもと共に教材を探しに行ってみることで、時には、子どもたちなりの目線での気づきを大切にして、主体的な学びに教員がつなげてあげることがこれからの教育にとって、

大事なことのように感じる。

4 D 小学校 2年

子どもたちと「大豆」を育てる中で

「大豆の種って、豆みたい！」（Hさん）

「・・・!？」（担任）

「だってさ、朝顔とかミニトマトは、朝顔とかミニトマトの形をしてなかったでしょ？でも、大豆は、豆って感じ！」（Hさん）

「そういうことかあ！」（担任）

たった一粒の種との出会いだけでも、子どもたちに「見えているもの」と私に「見えているもの」の違いをまざまざと見せつけられた私。そこに悔しさを感じていた私。そして、子どもたちの「見ようとしている世界」の豊かさを感じ、その世界を共に味わいたいと感じた私。

2年生になった33人の子どもたちと、今年は大豆を育てることに挑戦しています。トラクターで畑を耕したり、鳥たちから豆を守るためにどうしたらよいかを考えて試してみたり。土に割り箸をさして、その上に不織布をかぶせる『トンネル作戦』がうまくいったと思いきや、あっという間に大豆が大きくなり、またまた作戦会議。今度は、畑の隣にあった竹を切り出して、トンネルを作ることに。毎日畑へ足を運び、シートの中の大豆が食べられていないかを確認しながら成長を見守り続けた初夏。「やったあ、大きくなったあ!」「これでもう、鳥たちには食べられないよね!」と喜んでいたのも束の間。今度は、猛暑の中での草取り、そして、土寄せの時期になりました。その中で心に残っているのが、Iさんの姿です。教室を出る際に、「こんなに暑いのに草取り、やだ〜!」と叫んでいたIさん。畑に着くと、「なんでこんなことしなくちゃいけないの?」「この草たちめ!」と言いながら草取りを始めました。Iさんのことが気になり、私も隣で草取りを始めました。しばらくすると、Iさんのつぶやきが変わっていくことに気がきました。「今日の土、かたいなあ」「よしっ、うまく抜けた!」「根っこが残ったらダメなんだよな」「ふ〜、だんだん取った草がたまってきたぞ」。そして、草取りと土寄せを終える頃



には、「先生、これで台風が来ても大丈夫だね!」「今日のプール、絶対気持ちがいいよ!」と笑顔で語っていたのでした。

そこには、暑さの中でやり切った自分への手ごたえを感じていたIさんがいたように思います。

秋を迎え、いよいよ収穫を迎えた11月。脱穀、選粒の際にも、調べてきた方法を試してみても話し合いの繰り返し。

「ブルーシートを敷いて豆をたたく方法だとさ、早いんだけど、あとからゴミをとるのが大変!33人もいるんだから、みんなで手で取った方がいいと思う!」というYさんの投げかけから、すべて手作業で大豆を取り出し、よい状態の粒を選ぶことに。「今日は、(1つのさやに)3粒が多いね」(Hさん)、「そだね。でも、その分、粒が大きいね」(Aさん)、「わたし、4粒の当たりの日!」(Rさん)と、話をしながらもてきぱきと手を動かしていく子どもたちに“頼もしさ”を感じながら、2週間かけて、作業を続けました。獲れた大豆は、13kg。朝読書の時間、多くの子が図書館から大豆に関わる本を借りてきている様子を見守りながら、この子たちがどんな風に「1組大豆」を味わっていくのか、初めて口にした時、この子たちからどんな言葉が飛び出してくるのか、楽しみにしている私があります。

「今年と一緒に大豆を育ててみない?」と子どもたちに投げかけてから、半年が経ちました。子どもたちだけでなく、私にとっても、大豆を育てるのは、初めてのことでした。でも、初めてのことからこそ、子どもたちと一緒に試行錯誤し、“ドキドキ”“ハラハラ”“わくわく”する面白さを味わい続けています。そして、“その子らしく”大豆と関わり続けていく子どもたちの姿に「自分は、子どもの何をどんな風に見ているんだろうなあ」ということを、考えずにはいられない日々が続いています。

子どもたちと大豆を育てる中で、最も育つ機会をもらえているのは、私自身なのかもしれない。半年を振り返り、そんなことを感じています。

大豆と子どもたちの一年

1、大豆との出会い

春、去年の2年生から引き継いだ大豆を子どもたちに見せて、この大豆を今年はどうしていきたくか子どもたちに聞きました。すると、「去年育てて、ゆでて食べてたよね。おいしそうだったな〜。」私たちも育てたい!」「育てたのをみんなで食べたい!」という反応が返ってきました。そこで、今年、生活科で大豆を育てていくことにみんなで決めました。決まった後すぐに、一人ひとりに大豆の種を1粒ずつ配り、観察をしました。種を見て、子どもたちは「豆みたい!」「おへそがある。朝顔と同じだ!」「かたくてカンカンと音がする!」などと、様々な角度からの感想を言い合っていました。「どんな風に育っていくのかな?」「早く土に植えたい!」という声が聞こえてきて、どんどん育てたいという気持ちが高まっているようすが伝わってきました。

2、ハブニング発生

「早く芽が出るといいな」というみんなの思いが込められたポットを、教室のベランダにおき、毎日水やりをしながら待っていました。ある日、2、3本の大豆の芽が出ていました。子どもたちはそれを発見すると、「芽が出るよ!」「他の芽もきっと明日には出ていると思う!」「もっと大きくなってほしいな!」と、とてもうれしそうに報告しに来てくれました。しかし、その他の大豆のポットからは何日たっても芽が出てきません。「出てこないよ・・・。」「そうだね、なんでだろう?」待ちきれなくなって、土の中を掘ってみることにしました。すると、「あれ?種が割れてしまっているよ。」「ん?種がないよ?」と、子どもたちも異変に気がつきました。発芽がうまくいかずに割れてしまっているものと、そもそも豆がないものがあったのです。「水をあげすぎちゃったから割れちゃったのかな?」「でもないのはどうしてだろう?」「変だね・・・うーん・・・」と、子どもたちと話しながら原因を考え、みんなで困ってしまいました。お隣の1組さんでも、同じような出来事が起きており、そちらのクラスは、「学校にはハトが住んでいるから、ハトが食べちゃったんだよ。」という意見が出てきたようです。おもしろいなあと、子どもたちに「1組さんでは、ハトが食べたんだという話になってるみたいだよ。みんなはどう思う?」と、たずねたところ、みんなは、「ああ、確かにそうかも!よく見るよ!」「ハトは豆が好きだから、食べちゃったんじゃない?」「今度はハトに食べられないように教室の中に入れて育てた方がいいよ!」と私のクラスでも、ハトが食べたのではないかと考える子が多く見られました。実際に食べている現場を見たわけではないけれど、教室がある二階のベランダに来られるのは、翼があるハトだから、ハトが食べたのだ。という結論でした。子どもたちは生き物の生態をよく見ているし、想像力豊かに考えているのだなと驚かされた瞬間でした。子どもたちが決めたように、今度はポットを教室の中の窓際に並べ、様子を見守ることにしました。



3、畑作り

ポット作りと平行して、畑作りを進めていきました。去年から1年たって畑一面に広がった雑草を一生懸命抜いたり、ゴロゴロと石がたくさん出てきたので、「これじゃあ、大豆が育たないよ。」「ふかふかおふとんにしてあげないと。」と、がんばりながらみんなで石をとったりしました。

草取りや石取りがある程度すんだところで、畝を作っていました。ちょうどポットから芽が出てきたので、がんばって作ってきた畑に苗を植えました。今度はほとんどのポットから、芽が元気にニョキニョキと生えてきて、子どもたちはとても喜んで「早く大きくなってほしいね。」と話していま

した。

そんなうれしい出来事があった春～初夏ですが、国語の『かんさつ名人になろう』という学習と繋げて、大豆の観察をしました。観察するときに子どもたちは、実際に触ってみたり、においをかいだり、ある子はちょっとなめてみたりしながら観察をしていました。「茎の付け根の部分が緑じゃなくて紫色っぽくなっているよ。」「ポットの下から根っこが出てきていたよ。」「においは、しなかったよ。」「なめたら冷たかったよ。」などと一人ひとりが気づいたことを友達に話したり、私に伝えるに来てくれたりしました。「大きくなったらどうなるのかな。」「大きくなったときに、また観察したいな。」こんな声も聞こえてきたので、時々観察をしていくことを決めました。

4、夏休み前のみなさんと大豆

夏の日差しを浴びてぐんぐん大豆が育つ中、子どもたちが楽しみにしている夏休みが近づいてきました。となりました。夏休みに合わせて、学級花壇や北小の前の道路の脇にあるフラワーロードの水やり当番を決めました。すると、「あれ？大豆には水をいっぱいあげなくてもいいの？」「大豆にもあげなきゃだめじゃないの？」と、心配する声があがりました。種の頃から大事に育ててきた大豆のことを大切に思っているのだなと思い、私も嬉しくなりました。私が「大豆は、水をたくさんあげたり、肥料をいっぱいあげなくても育っていきけるすごいお野菜なんだよ」と伝えると、「え～すごい！」「強いんだねえ！」と驚いている様子でした。「でも、ときどきはあげてもいいの？」と聞いてくれた子もいたので、「そうだね！あげたいなと思ったらあげてもいいよ」という話をして大豆さんに「また2学期ね！」と元気にあいさつをして、いよいよ夏休みに入っていました。

5、花が咲いた大豆の観察

夏休みが明け、子どもたちが学校に戻ってきました。大豆はどうなっているかな？と、様子を見に行きました。すると、「花が咲いているよ！」「葉っぱが増えてるよ！」と大豆が成長しているのを見て驚いている様子でした。「観察日記つけなきゃ」子どもたちの声で、観察日記をつけることにしました。「小さな花が咲いていたよ。」「白色と紫の小さい花が咲いていたよ。」「豆の赤ちゃんがだんだんできてきたよ。」「小さい豆には、少し毛が生えていて気持ちよかったよ。」「もっと大きくなってほしいな。」などを話しながら記録して行っている様子がありました。暑い中でしたが、大豆のすぐ近くに行き触ったり、よく見たりして自分で確かめている姿が、素敵だなあと感じて見えました。

6、豆をゆでて食べました。

秋も近づき、大豆のさやがふくらんできました。さやの中の大豆を触りながら「もう食べられそうじゃない？」「あともうちょっとで全部の豆がいい感じになるよ。」と毎日のように大豆の中を確認する子がでてきました。そんな子がいることを紹介し、どうしたいかをみんなに相談したところ、「食べたい！」ということだったので。大豆を育てているところでしたが、一部を収穫して枝豆として食べることにしました。枝豆で食べてしまう分は、根っこごと抜いて豆をとりました。「豆が上を向いてついているよ。」「虫食いがある。これは食べない方がいいな。」「根っこに丸い何かついてるよ。不思議だな。」などと引き抜いて気づいたことを話しながら、給食で食べる自分用の豆を2つ選びました。給食では、他のおかずと一緒に、枝豆をみんないただきました。「甘かったね！」「おいしい！もうなくなっちゃった。と思ったよ。」「家族にも食べさせてあげたいな。」と、給食は黙食のため、すぐには感想を言えない状況でしたが、ぱっとマスクをつけ、このようにつぶやいた子が何人もいました。子どもたちと相談して、残りの枝豆はお家に持って帰ることにしました。「おいしすぎ

て、知らないうちにお母さんが全部食べちゃった。」「家族がみんなおいしいと言ってくれた！」など、お家で食べた感想を日記で書いてきてくれたり、次の日に私に話しに来たりする子もいました。

7、味噌造り

秋が深まり、大豆の葉っぱが黄色っぽくなってきた時期に、残りの大豆をどうしたいか話しました。子どもたちの中からは、「納豆にしたい。」「豆腐にしたい。」「おみそにしたい。」などの意見がでてきました。その中から出てきた食品の中で作れそうな物を考えていきました。そして、学区内にあるある味噌やさんに味噌造りを依頼することにしました。

新型コロナウイルスの感染者数が多い時期があり、みそづくりは難しいと考えたこともありましたが、幸い県内のレベルも下がり、実施することになりました。

楽しみに待っていた味噌造りの日がやってきました。私も味噌造りは初めてだったので、子どもたちと一緒に期待をふくらませていました。まず、大豆をつぶしていきました。「むにゅむにゅする！」「気持ちいい！」そんな声が聞こえてきました。次に、こうじをバラバラにします。さらに、塩水に既製の味噌をときます。それから、つぶした大豆にこうじを混ぜ、ドーナツのような形を作ります。そして、その中に味噌を溶いた塩水を入れ、さらに混ぜていきます。つぶして、こねて、混ぜてひたすらその作業を繰り返していきました。味噌やさんの教えてくれた手順でどんどん進めていく中で、子どもたちは「けっこう大変！」「味噌やさんは、毎日これをやっているのかな？すごい！」等の感想を言い合っていました。



よく混ぜて、粒が細くなってきたところで、次は味噌玉作りに移りました。粘土作りを楽しむ感のように、雪だるまや、いもむしなどの形を作っていました。あるグループでは、一人は大きさを決め、一人は丸め、一人は大豆の粒がつぶれていないか確認し、最後の一人は最終確認をする・・・といったようなきれいで完璧な味噌玉を作るための役割を決めて、味噌玉をつくっていました。他のグループが、その次の行程に進んでいることを気にせず、没頭している姿が、すごいと感じました。みんなで作った味噌玉を樽に「おいしくなれ！」という気持ちを込めて投げ込んだ後、みんなでお掃除を済ませ、味噌やさんのお話を聞いたり、味噌造りの感想を言い合ったりする活動をしました。最後に樽の回りに集まって記念撮影をしました。樽を目の前に、「はやくできるといいな。」という楽しみな気持ちでいっぱいになっている様子が、表情からも伝わってきて私もうれしくなりました。

8、お礼の手紙を味噌やさんにお届け

味噌造りでお世話になった味噌やさんにお礼の手紙を書きました。味噌やさんは学区内にあることと、そんなに遠くない場所にあると言うことを伝えると、「みんなで直接届けに行きたい！」と言う声が聞こえてきたので、実際に届けに行くことにしました。みんなで並んで柳町の昔ながらの通りを歩いて、「なんか江戸時代に来たみたい。」と、景色を楽しみながら向かいました。実際に届けに行くと、お世話になった味噌やの皆さんが温かく迎えてくださいました。大きな銀色のケースを見せていただき、その中には1トンの味噌が入っており、時々人間が直接その中に入り、体全身をつかって混ぜることも教えていただきました。お礼の手紙を渡した後、担任からのサプライズとして、売店で売られている味噌せんべいを買って帰りました。教室で大事そうに食べている子どもたちの姿がとてもうれ



しそうで、とても印象に残っています。「味噌はおせんべいにつけてもおいしいんだ。」「はやく 2 月になって、できあがってほしいな。」と、ますます味噌ができあがるのが楽しみになったことを伝えてくれた子もいました。

9、これからの大豆

味噌造りを終え、季節は冬へと移り変わっていきました。畑に残った最後の大豆を収穫しました。3 学期にその大豆をどうしていくかについて、今は話し合っているところです。「今の 1 年生にあげたい。」「お家に持って帰りたい。」「みんなで料理して食べたい。」と、いう選択肢が出てきています。「1 つに絞らなくてもいいよ。」と、伝えたところ、まずは「みんなで料理をして食べる。」を一番にすることに決めました。「今まで育ててきた野菜をみんなで食べると思い出になるから。」「このクラスで食べられるのは、もうあとは大豆しかないから。」「みんなで食べるとおいしいから。」という理由を、子どもたちは話していました。どんな料理になるかは、クローズドブックで検索をしながら考え中です。どんなものを作って、子どもたちがその時どんな表情を見せてくれるのか、とても楽しみです。



五 研究のまとめと課題

1 視点①：対象と繰り返し関わる中で見えてくる子どもの姿とその変容に関わって

子どもが対象と繰り返し関わるができるよう、子ども自身の「やってみたい」「試してみたい」という思いを大切に、追究の場や時間を保障していくことで、子ども達の中により追究の意欲が芽生えてくること分かってきた。

また、対象を常に身近に感じる場を仕組んでいくことで、子ども達に課題解決の必要感が生まれ、より自分事として追究を繰り返していく姿が見られるようになっていった。小さな課題解決を重ねていくことで、子どもたちは無理なく課題と向き合い、前向きに取り組む事ができ、さらなる追究への意欲につながっていった。

2 視点②：子どもの追究に寄り添う教師の支援のありかたに関わって

子どもと共に歩き、共に体験をする。子どもと共に驚き喜ぶ。といったように、子どもと共に夢中になって活動する中で、教師自身が子どもの楽しみや学びを感じられるようになっていく。そして教師自身も対象と関わることで感じた事をありのままに表現していくことで、子どもが対象をどのように見ているのか、子どもに対する教師自身の見方、とらえ方が変化していく事に気づき、子どもの表情や言葉に表れないような少しの変化にも気づくことができるようになっていくこと分かってきた。

子どもが見ている景色を教師自身が感じ、子どもと共に学んでいけるよう、子どもの思いをより細やかにとらえ、子どもの思いに添った教師の支援のあり方を引き続き研究を続けていきたい。

